

アウグスティヌスの社会的三位一体論に関する一考察

一回心の三一性モデル

九里 秀一郎*

要約

アウグスティヌスは「三位一体論」の第8巻において、プラトンの善と心の関係によって回心の三一性を説明した。著者は目標とする社会的三位一体モデルと回心の三一性の関係に大きな関心を持っている。本稿では、この点を明らかにするために、次の四つの視点から検討する。一つ目は、アウグスティヌスの三位一体論の根本思想である愛の三一性：“愛する人、愛されるもの、意志または愛”との関係。二つ目は、個人、集団、共同体に対する回心や悔い改めなど、さまざまな聖書の記事との関係。三つ目は、パネンベルクの場の理論に基づいて、善または神を場と考えた時に、心に作用する力。四つ目は、パネンベルクの三位一体論における外に向かう一つの行為としての回心理解。検討した結果は、次の二つにまとめられる。一つ目は、回心の三一性モデルは、アウグスティヌスが論じた記憶・知解・意志または愛による精神の三一性モデルの外向きの行為として理解できること。二つ目は、回心の三一性モデルは、聖書の集団的な回心についても、類比として説明が出来ると思われること。以上の結論から、精神における三一性に回心の三一性を加えることにより、アウグスティヌスの三位一体論が社会的三位一体論へと拡張される可能性が明らかになった。

キーワード アウグスティヌス 回心 パネンベルク 場の理論 社会的三位一体論

目次

- 1 序論
 - 1.1 研究の目的
 - 1.2 前回の要点
 - 1.3 パネンベルクの三位一体論
 - 2 方法
 - 3 結果
 - 3.1 プラトンの善と悪
 - 3.2 プラトンの回心
 - 3.3 聖書の善と悪
 - 3.4 聖書にある回心
 - 4 考察
 - 4.1 回心の理解
 - 4.2 回心の三一性モデル
 - 5 結論
- 凡例
引用文献・注
参考文献

1 序論

1.1 研究の目的

アウグスティヌスの『三位一体論』第8巻では¹、三位一体論の探求方針として、愛の三一性「愛する人、愛されるもの、愛」が論じられる。第9巻から、愛の三一性を人間の精神に探求し、最終第15巻では、記憶・知解・意志または愛から成る精神の三一性モデルを完成する。これは心理学的三位一体論と呼ばれ、現代でもしばしば引用される。一方、第8巻では、多くの隣人愛に関する議論の結果愛の三一性が導出されているので、本来はもっと人間関係的な三位一体論であるべきではなかろうか、という疑問が残る。本研究は、このような点に注目して、隣人愛に根差した社会的三位一体論の可能性を探っている²。

前回の論考では、「愛する人」と「愛される人」という二人の関係において隣人愛を検討した。その結果、次のようないくつかの課題が見出された。そもそも父と子のペルソナにある同質性（ホモウシオス）が、私たちと他人との間に在るのだろうか。親子の間でも確実に存在するとは言えないのではなかろうか。「わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである。」（マタ25:40）という隣人愛の代表的な言葉にしても、最も小さい者と、この人を愛する人、この両者の同質性とはいったい何だろうか。これを隣人愛と呼ぶなら、小さな隣人を利用して自己の利益を求めているのだろうか。あるいは、小さな隣人をキリストの偶像として拝んでいないだろうか。

以上の問題意識を背景として、「互いに愛し合いなさい。」という、ヨハネによる福音書にある隣人愛の形に気づいた。「互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。」（ヨハ13:34）このイエスの言葉は、主従関係ではなく、対等な隣人との関係における愛である。そこで今回は、対等な二人の人間が、共通のものを愛する場合の隣人愛を考察した³。共通のものを愛する人間同士は、それゆえに互いに愛し合うと思うからである。例えば、被災地ボランティアたちは復興をめざして、大きな隣人愛を持って互いに励まし合うであろう。共通のものとは、共通の理念、思想、行動、生活など果てしなく存在し、神と人の仲介者、結婚の仲人と呼ばれる人間の場合もある。

本研究の目的は、共通に愛するものを「善」として、人が善に立ち帰る回心の三一性モデルを探求することである。「善」を選んだのは、「私たちは神の中に生き、動き、存在する。」（使17:28）という聖句にある「神」を、アウグスティヌスが「善」に置き換えて、「私たちは善の中に生き、動き、存在する。」と語ったことが理由である⁴。彼は、そうすることにより、プラトン哲学的⁵に論ずることを読者に伝えたと考えられる。アウグスティヌスは善の心を求める意志に、回心の三一性を認めテキストで論じた⁶。今回は、その議論を出発点とし、次の四つの視点を新たに加えて論ずる。一つ目は、アウグスティヌスの三位一体論の根本思想である愛の三一性：“愛する人、愛されるもの、意志または愛”との関係。二つ目は、個人、集団、共同体に対する回心や悔い改めなど、さまざまな聖書の記事との関係。三つ目は、パネンベルクの場の理論に基づいて、善または神を場と考えた時に、心に作用する

力。四つ目は、パネンベルクの三位一体論における外に向かう一つの行為としての回心理解。これらの視点が本研究の特長であり、アウグスティヌスの三位一体論が社会的三位一体論へと拡張されることを目指している。

パネンベルク⁷の「場の理論」は「私たちは善の中に生き、動き、存在する。」という一文にある「善」を場とみなす考え方である。「善の場」は、回心を起こす「力」を導き、集団的な回心などの可能性につながる⁸。また、場の理論は三つの神的位格が、外に向かって働く行為に於いて、共通の性質を持つことを主張する。その結果、アウグスティヌスと同様に、「神の永遠の力と神性は被造物に現れており、これを通して神を知ることができます。」(ロマ1:20) という三位一体論の基本的な探求方針が場の理論と一致している。

1.2 前回の要点

前回は、二つの人格について、以下の愛の三一性を考察した⁹。(3)が筆者独自の案である。

(1) 隣人愛の三一性

A 愛する人、愛する隣人、隣人を愛させる愛 (他者を愛する)

B 愛する人、隣人を愛させる愛、愛そのもの (自己を愛する)

(2) 神への愛の三一性

C 愛する人、愛する神、神を愛させる愛 (神である他者を愛する)

D 愛する人、神を愛させる愛、愛そのもの (自己を愛する)

(3) 互いに愛し合う愛の三一性

E 愛する人、愛に答える人、互いに共通の愛 (他人を愛する)

F 愛する人、互いに共通の愛、愛そのもの (愛する人が自身を愛する)

G 愛に答える人、互いに共通の愛、愛そのもの (愛に答える人が自身を愛する)

(1)は、愛の三一性の「愛されるもの」を「愛する隣人」に置き換えただけである。(2)は、同様に、「愛する神」に置き換えただけである。(3)が、新しく考案されたものである。多少表現が分かりにくいだが、この場合は、「愛する人」「愛に答える人」「互いに共通に愛するもの」以上の三つの実体が存在する。二人の人が、互いに共通に愛するものを愛するとき、それぞれは互いに共通の愛を愛するのである。例えば、互いに共通に愛するものとして趣味があった場合、互いに共通の趣味が親しい人間関係を構築するような場合である。

本稿では、(3)の形を議論の出発点とし、互いに共通の愛として「善」を選ぶ。第8巻では、愛の三一性の愛は「善の愛」であることが選択の理由である。二人の人が共に同じ善を愛するという形は、当初から、同じ善を愛する二人以上の人が想定されることになる。

1.3 パネンベルクの三位一体論

パネンベルクの場の理論にもとづく三位一体論は一般には難解¹⁰である。以下は、本論の考察で参考にした部分である。

彼は著書「組織神学」第1巻で、神の霊について、ギリシャの伝統的な理性または知性であるヌース¹¹より、マイケル・ファラデーの場の理論¹²が相応しいことを指摘した¹³。

神の霊に関する聖書の諸言明は、《ヌース》としての神についての古典的表象よりも、近代の、マイケル・ファラデーによって初めて考えられた、普遍的な力の場合—これとの関連で、あらゆる物質的、粒子的形成物は、第二次的な発現とみなされる—の表象に、非常に近いところに立っている。ここから、三一論的諸位格と、それらすべてに共通な神的本質の間の関係の新しい理解のための、驚くべき諸可能性が生じてくる。

パネンベルクは、電磁場の理論を参考にして、神の霊をダイナミックな場としての神的生命を理解した¹⁴。

ダイナミックな場としての神的生命という理解によって、次のように考えることが完全に認められる。つまり三つの位格をひとつにする神の霊を、父から発出し、子によって受け取られ、同時に二つに共通の、そしてまさにそのようにして二つとは異なる、それらの交わりの力の場合として考えることがゆるされる。

パネンベルクは、このような場の実体性の理解にもとづき、一体性から三つの位格を導出するのではなく、三つの位格の共同性を神的生命として、外に向かった神の行為に注目した。一体性を除外すると三神論になるので、彼はその一体性を三つの位格の「行為の共同性」に結び付けた¹⁵。

三一論的諸位格は、ひとつの神的生命の現存在様式としていつもすでにそのダイナミズムに貫かれている、しかもそれらの相互的諸関係を通してそのダイナミズムに満たされている。このことがさらに明瞭になるのは、愛としての神的生命の特質が問題にされるときである。

パネンベルクが神の霊に場の理論を適用した結果、被造物のもとで、愛としての神的生命のダイナミズムを観ることができると言う。私たちの生活で例えるならば、父・子・聖霊チームの愛の活動に一体性を見ようとするものである¹⁶。しかし、共同性と一体性の微妙な違いを次のように語る。

行為の共同性 (Gemeinsamkeit 共通の性質、共有) は本質の一体性を基礎づけることも、その代わりとなることもできない。しかし父、子、聖霊の行為の共同性において、それを通して三つの位格がいつもすでに結ばれている「生命および本質の一体性」が明らかになるのである。

父・子・聖霊チームを内三位一体的生命、チームの活動を経論的三一性と呼び、次のように語る¹⁷。

それゆえ神の行為の思想は神御自身における神の存在を世界における神の存在と結びつける、つまり神の内三位一体的生命を経論的三一性と結びつける。この経論的三一性は、救済の経論のうちにあるその諸々の被造物のもとにおける、父、子、霊の活動的臨在に他ならない。そのさい行為の概念は、神の内的生命にとって、その神性の永遠なる自己同一性にとって、神の救済経論的活動がもつ妥当性を明らかにすることに

役立つことができる。

パネンベルクの神の探求方針はアウグスティヌスと多くの点で共通している¹⁸。

あらゆる三一論的差異化に対し、それに先立つ神的本質の一体性が主張され、そこでは、その一体性から実質的に区別されたものという表象はすべて排除される—たとえ神における三つの「位格」の区別が、それにより不可解な秘密となってしまうという犠牲を払うとしても—という具合に規定される。アウグスティヌスはその著『三位一体論』においてこの道を進んだ。そのきっかけとなったカッパドキアの教父たちの命題、つまり、三つの神的位置は、外に向かって働くという共通の性質をもつとの命題であった。そこから、神の一体性は被造物の諸々の働きからのみ認識されうるとの結論がでてきた。

パウロの被造物を通して神を知る思想が両者で一致している。アウグスティヌスは被造物である人間の精神に神の似姿を求めたが、彼の心理学的考察は精神の複雑さに比べると、単純すぎるという批判がある¹⁹。これについて、パネンベルクは以下の様に語る²⁰。

アウグスティヌスは、神的本質の一体性から三一論的区別を引きだそうとしなかった。彼が、三一性に関する彼の著作のなかで提出し、そして論究した諸々の心理学的類比は、一体性と三性の、ありうる調和—たとえわずかであれ—の表象を提供し、三一論的教義の諸言明に一定の説得力を与えるにすぎない。このような諸々の類比は、外に向かう諸々の神的な働きの共同性という命題にもかかわらず、可能である。

アウグスティヌス自身もこのように考えており、本稿の回心の三一性モデルなど、他の三一性モデルの可能性を十分承知している。

2 方法

アウグスティヌス『三位一体論』第8巻をテキストとし、回心の三一性モデルを探求する。序論で述べたように、次の四つの視点を新たに加えて論ずる。一つ目は、アウグスティヌスの三位一体論の根本思想である愛の三一性：“愛する人、愛されるもの、意志または愛”との関係。二つ目は、個人、集団、共同体に対する回心や悔い改めなど、さまざまな聖書の記事との関係。三つ目は、パネンベルクの場の理論に基づいて、善または神を場と考えた時に、心に作用する力。四つ目は、パネンベルクの三位一体論における外に向かう一つの行為としての回心理解、以上である。

まず、プラトンの回心の理解について、第3章を中心に整理して結果にまとめる。具体的には、「善」の理解、独自の「悪」および「回心」の理解である。今回は、独自の三一性を考察するために、関係部分の原文を抜粋して忠実にまとめる方法で整理する。説明が不足する場合は、自叙伝『告白』を参考に補足する。続いて、同様な調査を「聖書」をテキストとして、同様の調査内容及び方法で行う。これらの調査は、第8巻全文データベース、聖書データベースを検索して行う。

考察では、「回心の理解」という題目で、プラトンの回心と聖書信仰にもとづく回心を

比較検討する。この検討結果に基づき回心の三一性モデルを模索する。

3 結果

3.1 プラトンの善と悪

アウグスティヌスにとって、善と悪の理解は若い頃からの深刻な悩みの一つである²¹。このことが彼のマニ教からキリスト教への回心の原因でもある。テキストからプラトンの善と悪について、重要な部分を引用して整理する。

●すべての善の善である神 三8:3:4:1

プラトン哲学を援用した表現により、善から神を知ることができる²²。プロティノスによれば、「神」の部分は、単に「善」または「一」という名称になる²³。

見よ、出来るなら、再び視よ。君はたしかに善きものでなければ愛さない。高い山、なだらかな丘、広々とした平野をもつ大地は善い。美しい肥沃な農園は善い。均整のとれた、宏大な明るい家は善い。精気に満ちた身体を持つ動物は善い。温暖で健康に適した空気は善い。甘美で身体のためになる食物は善い。苦痛や疲労のない健康やかな状態は善い。均衡がとれて明るい表情と輝くばかりの色艶をもった人の顔は善い。甘やかな一致と信実な愛をもつ友の心は善い。正しい人は善い。富は困窮から脱するのに役立つから善い。太陽と月と星辰をもった天体は善い。天使の聖なる服従は善い。甘美に教え、聞く人にふさわしく助言する談話は善い。そのリズムとその思念が荘重な詩歌は善い。これ以上なお何を述べようか。これは善い、あれは善い。これも取れ、あれも取れ、そしてもし出来るなら、善そのものを見よ。そのとき、君は或る他の善によって善であるのではなく、すべての善の善である神を見るであろう。

上記の結びは、善の善である神となっており、プラトン哲学の善が神学の神へ移る。アウグスティヌスがプラトン哲学を援用する典型的な例である。ここは善きものを列挙しており、プラトンの善、神の善に由来するものと思われるが、天使だけでなくアウグスティヌスの好みまで登場している。このようなユーモラスな記述は、自叙伝『告白』が最高傑作であるが、彼の性格は三位一体論でも同様に見える。

●愛することによって固着すべき魂の善 三8:3:4:2

アウグスティヌスの時代には、万物の原因とされる唯一の善から善が流出したとする新プラトン主義の説が広く知られていた²⁴。彼がこの思想に強い影響を受けたことを自叙伝「告白」に記している²⁵。しばしば用いる刻印された善の概念について、次のように書かれている。

実に、これらのすべての善において、すなわち私が今述べたもの、あるいは他の人が見たり考えたりするものにおいて、私たちが真実に判断するとき、もし私たちに善そのものの観念—それによって私たちは或るものを是認し、また或るものを他のものより優位に置くのであるが—が刻印されていないなら、或るものを他のものよりも善いと言わないであろう。かくて、この善あの善ではなく、善そのものである神を愛さな

ければならない。私たちが問い求めなければならないのは魂の善であって、それは魂が判断することによって、それを超え出るべきものではなく、むしろ愛することによって固着すべきものである。この善は神でないとするなら、一体何であろうか。神は善き心でもなく、善き天使でもなく、また善き天体でもなく、まさに善なる善きお方にいます。

「刻印された善そのものの観念」とは何であろうか。それは魂の善と呼ばれ、周囲の善が善であることを判断し、まるで自分のものでないように固着する善そのものであり神であるという。魂の善とは、魂の神ということであろうか。このように善が魂に局在する表現は、パネンベルクの場の理論あるいは、現代の場の量子論を思い起こさせる。電磁場は、空間に広がった波動性と空間に局在する粒子性の二重性を持つ場の理論として記述される。

以下は、自叙伝『告白』から善悪に関する部分を抜粋したものである。プラトンの影響を強く受けた独自の聖書解釈と考えられる。

●悪というものは実体ではない。上7:12:18

万物が善に造られたなら、なぜ悪は存在するのかという問いが、アウグスティヌスを悩ませた。ようやく得た理解は、悪は実体として存在しないというものである。

それから、朽ちるべきものも善であることが私に明らかになった。朽ちるものは、最高善であれば朽ちるはずはなく、また善でなければ朽ちるはずはない。もし最高善であれば朽ちるはずはなく、また善でなければそれらのうちに朽ちるようなものは何もないからである。・・・それゆえ、それらは存在するかぎり善である。それゆえ存在するものはすべて善である。わたしがその起源を探求していた悪というものは実体ではない。もしも実体であれば善であるだろうからである。

実体ならば善、悪は善ではない、従って悪は実体ではないという三段論法である。朽ちる善という表現は、本来あるべき善が減少することを意味するのであろう。

●適合しないから、悪と考えられる。上7:16:22

悪には実体が無いが、私たちに悪と見えるのは、個々の部分で他と適合しない部分であるとする。

あなたに悪はまったく存在しない。あなたに存在しないばかりではなく、あなたの被造物全体にも存在しない。あなたがそれらに定められた秩序を、侵入してきて破壊するような何ものも、その外に存在しないからである。しかし、それらの個々の部分には他の部分に適合しないから、悪と考えられるものがある。ところが、こういうものも他のものに適合すれば善であり、それ自体としても善である。

●深淵の底に引き落す欲望 下13:7:8

アウグスティヌスは創世記の最初の2節「初めに、神は天地を創造された。地は混沌であって、闇が深淵の面にあり、神の霊が水の面を動いていた。」に、三位一体の神が書かれているという。「神」が「父」、「初めに」が「子」、「霊」が「聖霊」と言う²⁶。聖書の冒頭から神は三位一体であるという解釈はすばらしいがかなり独特である。その部分の、

聖霊の説明は善悪に密接に関係している。水の中の心が、水面の霊による愛の力を受けて上下する表象である。心を引き上げる愛の力と、下方に引き下げる愛の力があり、まるで電磁場の理論のようで、プラトンの信仰理解のようである。あるいは、以下3.3にあるパウロの「虚無に服す被造物」(ロマ8:20-23)の概念とも似ている。

わたしはだれに語ろうか。またどのように語ろうか。わたしは、深淵の底に引き落す欲望の重圧と「水の面を覆っていた」あなたの霊による愛の引き上げる力とについて、だれに語ろうか。またどのように語ろうか。わたしたちがそのうちに没し、それからまた現われ出るのは空間的な場所ではない。これよりも似て非なるものがあるであろうか。そうするのは情念であり、愛である。わたしたちの不浄な霊が世のものに煩う愛によって、わたしたちを下方に引き下げ、あなたの聖なる霊が確固不動のものを求める愛によってわたしたちを引き上げるのである。こうしてわたしたちは、わたしたちの心をその「霊が水の面を覆っている」あなたのもとに高めるのであり、わたしたちの心が「なんらの実体性をも持たない水」を乗り越えたとき、あの卓越せる休息に到達するのである。

3.2 プラトンの回心

プラトンの回心の意味は、信仰上の回心ではなく、悪を戒め善に向かう意味での回心である。信仰上の回心とプラトンの回心との比較において、どこまで三位一体の神の類比が可能かが問われる。「回心する神」を論ずるのではなく、人間の回心の三一性に、誰もが三位一体の神を見ることができると、このことが回心の三一性モデルに問われる。

●善から乖離、善に向かう意志 三8:3:4

心が善から離反、乖離して回心の起こること、「心、善き心、意志」の三一性について語る。これは、愛の三一性に属するが²⁷、アウグスティヌスの精神の三一性モデルほど単純ではない。もっと個別的な動的な面を検討しなければならない。

善き心であるためには、自分の意志を働かせなければならない。心であることそれ自体が善きものではないというのではない。そうでなければ、どうして心は身体より優れているのだ、ときわめて真実に言われるであろうか。しかし、まだ善き心であると言われたいのは心をより善いものにするために意志を働かせないからである。もし心があることに気を配らないなら、非難されるのは正当であり、善い心ではないと言われるのは正しい。その心は意志を働かせる心とは異なる。意志を働かせる心は賞讃すべきであるから、意志を働かせない心はたしかに非難すべきである。しかし心が熱心に意志を働かせ、そして善き心となるなら、それは心が自分でない或るものに向って回心することによってのみ可能である。さて、心がそれを愛し、欲求し、願望するとき、善に向ってでないとするなら、善き心になるために何に向って回心するのであるか。心がその善から再び離反し、善から背離するというこのことによって善き心でなくなる時も、もし心がそこから背離するあの善が心の中になお留まってい

ないなら、心が善くなろうと欲しても、再び回心する道が存在しないことになる。

アウグスティヌスの精神の三一性モデル「記憶・知解・意志」²⁸の関係性は回心にとって極めて複雑な精神活動であろう。回心には記憶、知解、意志が機能する。知解が善き心を判断するのであろう。この精神の三一性が善に向かってダイナミックに働く時、結果として回心が起こると考えられる。

●善への回心 三8:3:4

仮に、私たちの心が善から遠ざかるようなことがあっても、意志を働かせることによってこの善に立ち返ることができる。善き心でないときも、善が心に留まっているから可能であるという。

しかし心が熱心に意志を働かせ、そして善き心となるなら、それは心が自分でない或るものに向って回心することによってのみ可能である。さて、心がそれを愛し、欲求し、願望するとき、善に向ってでないとするなら、善き心になるために何に向って回心するのであろうか。心がその善から再び離反し、善から背離するというこのことによって善き心でなくなる時も、もし心がそこから背離するあの善が心の中になお留まっていなかったら、心が善くなろうと欲しても、再び回心する道が存在しないことになる。

●善の中に生き、動き、存在する 三8:3:5

私たちは、近くにある善のおかげで善に回心する。回心とは、心を善において完成しようとする意志によって起こる。人間の心は、善の中に生き、動き、存在すると言える。

心は善くなるために、心たらしめるあの善に回心する。だから、心が意志の背離によっても失わなかったあの善が意志の回心によって愛されるとき、意志は心を善において完成するため、その本性に相応しく働くのである。・・・だから、この善は私たち各自から遠く離れて在るのではない。私たちはこの善の中に生き、動き、存在する（使徒17:27, 28）からである。

善の中を動く心の表象は、太陽の周りを惑星が回る重力場の表象と重なる。パネンベルクの「霊の場」と「善の場」についても、類比の関係があるように思われる。

●善への愛 三8:10:14

愛は善いものと考えられ、愛は愛する人と愛するものを結びつける三一性であることを次のように語る。

しかし、聖書がこれほど賞揚し告知する愛（dilectio, caritas）は、善の愛（amor）でないなら、一体何であろうか。しかし愛は或る愛する人の愛であり、愛によって或るものが愛されるのである。視よ、ここに三つのものがある。愛する人と愛されるもの、そして愛である。したがって愛とは愛する人と愛されるものという二つを一つにし、あるいは一つにしようとする或る生命でないなら、何であろうか。それは外的・肉的な愛についてもあてはまる。

アウグスティヌスは、「愛する人、愛されるもの、愛」という関係に三位一体の神の類比

の可能性を見出す。この愛の三一性を人間の精神に構築したのが精神の三一性モデルである。この心理学的三位一体論は、実に緻密な議論を経て、人間の精神に三位一体の神の片鱗をおぼろげに見ることに成功していると言ってよいであろう。

3.3 聖書の善と悪

旧約聖書、新約聖書それぞれにおける善と悪の基本的な理解を確認する。プラトンの善と悪を対比するためである。

●万物を良しとされた神 創1:1-5 創5:1-2

創世記には、天地創造におけるすべての被造物を神が「良し」とされ、祝福した記述がある。聖書には、創造の第一の日について、次のように記されている。

初めに、神は天地を創造された。地は混沌であって、闇が深淵の面にあり、神の霊が水の面を動いていた。神は言われた。「光あれ。」こうして、光があった。神は光を見て、良しとされた。神は光と闇を分け、光を昼と呼び、闇を夜と呼ばれた。夕べがあり、朝があった。第一の日である。(創1:1-5)

神は人を創造された日、神に似せてこれを造られ、男と女に創造された。創造の日に、彼らを祝福されて、人と名付けられた。(創5:1-2)

創造した万物がすべて「良し」ならば、すべてが善であり悪は存在しない。人間も神が創造した被造物の一つであるから、人間もすべて善である。

●取って食べるなど命じた木から食べる 創3:8-12

創世記冒頭から罪を解釈するのは独特であるが、よく知られた「善悪の木の実」を食べた物語の方が一般的な人間の罪の話として知られている。「それを食べると、目が開け、神のように善悪を知るものとなることを神はご存じなのだ。」(創3:5)とあるように、神が善悪の基準である。神に創造され祝福された人間は、神に背いて樂園を追放される。

その日、風の吹くころ、主なる神が園の中を歩く音が聞こえてきた。アダムと女が、主なる神の顔を避けて、園の木の間に隠れると、主なる神はアダムを呼ばれた。「どこにいるのか。」彼は答えた。「あなたの足音が園の中に聞こえたので、恐ろしくなり、隠れております。わたしは裸ですから。」神は言われた。「お前が裸であることを誰が告げたのか。取って食べるなど命じた木から食べたのか。」アダムは答えた。「あなたがわたしと共にいるようにしてくださった女が、木から取って与えたので、食べました。」

樂園追放後も、人間の罪の物語が続く。アベルとカインの物語は、人類最初の兄弟殺しである。ノアの箱舟、バベルの塔など、神から離れる人間の姿が続く。

●万物は言によって成った。ヨハ1:1-10

ヨハネによる福音書は、新約聖書の天地創造物語とも言われる。

初めに言があった。言は神と共にあった。言は神であった。この言は、初めに神と共にあった。万物は言によって成った。成ったもので、言によらずに成ったものは何一

つなかつた。言の内に命があった。命は人間を照らす光であった。光は暗闇の中で輝いている。暗闇は光を理解しなかつた。神から遣わされた一人の人がいた。その名はヨハネである。彼は証しをするために来た。光について証しをするため、また、すべての人が彼によって信じるようになるためである。彼は光ではなく、光について証しをするために来た。その光は、まことの光で、世に来てすべての人を照らすのである。言は世にあった。世は言によって成ったが、世は言を認めなかつた。

新約聖書では、三位一体の子が父と共に万物を創造したと語る。救い主イエスが主人公である物語であるから、神は善であり、神の創った人間はもともと善であるが、今は罪の内にあり善ではなく救いを求めているという話の流れである。旧約聖書の物語と救いを求める人間のストーリーは同じである。

●神おひとりだけが善 ルカ18:19

福音書には、神の善に関する直接的な記述は次の言葉以外には見当たらない。神以外の人間、すなわち私たちは善い者ではないと言う。

イエスは言われた。「なぜ、わたしを『善い』と言うのか。神おひとりのほかに、善い者はだれもいない。

●神が前もって準備した善 エフェ2:10 三ヨハ1:11

新約聖書は、イエス・キリストに見習うことが善であると勧める。

なぜなら、わたしたちは神に造られたものであり、しかも、神が前もって準備してくださった善い業のために、キリスト・イエスにおいて造られたからです。わたしたちは、その善い業を行って歩むのです。(エフェ2:10)

愛する者よ、悪いことではなく、善いことを見倣ってください。善を行う者は神に属する人であり、悪を行う者は、神を見たことのない人です。(三ヨハ1:11)

●被造物に現れる神の力と神性 ロマ1:20

新約聖書では、神は目に見えないと書かれている²⁹。しかし、神が創造した被造物に神の性質が現れていて、人間はそれを通して神を知ることができると言う。

世界が造られたときから、目に見えない神の性質、つまり神の永遠の力と神性は被造物に現れており、これを通して神を知ることができます。

これはアウグスティヌスやパネンベルクの三位一体の神を探求する方針である³⁰。

●虚無に服す被造物 ロマ8:20-23

パウロは肉の法則に仕える人間を、被造物の霊が神の意志で虚無に服している状態に例える。そして、すべての被造物、人間を含めて霊の解放を待ち望んでいることを次のように語る。

被造物は虚無に服していますが、それは、自分の意志によるものではなく、服従させた方の意志によるものであり、同時に希望も持っています。つまり、被造物も、いつか滅びへの隷属から解放されて、神の子供たちの栄光に輝く自由にあずかれるからです。被造物がすべて今日まで、共にうめき、共に産みの苦しみを味わっていることを、

わたしたちは知っています。被造物だけでなく、“霊”の初穂をいただいているわたしたちも、神の子とされること、つまり、体の贖われることを、心の中でうめきながら待ち望んでいます。

3.4 聖書にある回心

旧約では「回心」という語はほとんど見当たらず、「立ち帰る」という表現がそれに近いであろう。預言者たちが背信のイスラエルの民に「神に帰れ」と、叫び求めるのはイスラエルの回心を求めているとも言える。この場合、神は個人と言うより、イスラエルの民全体に回心を求めている。イエスは「悔い改めよ。天の国は近づいた」(マタ4:18)と語り、病人を癒した。イスラエルが立ち帰ることを求めるイエスの福音宣教活動である。ここでは新約聖書の回心に関する記事、特に神と人間とのつながりが分かり易いものを調査する。

●炎のような舌 使2:14

聖書の時代から今日まで、キリスト教に回心した証の儀式として洗礼(バプテスマ)が行われる。洗礼は聖霊によって生まれ変わる意味を体に水を浴びる儀式で表現する。イエスが十字架で罪人として処刑された後、天から下った聖霊が、弟子たちの不安をぬぐい、再びイエスの弟子としての勇気を与えたという物語がある。これはイエスの弟子の集団回心とも言える出来事で、使徒言行録の最初に次のように記されている。

五旬祭の日が来て、一同が一つになって集まっていると、突然、激しい風が吹いて来るような音が天から聞こえ、彼らが座っていた家中に響いた。そして、炎のような舌が分かれ分かれに現れ、一人一人の上にとどまった。すると、一同は聖霊に満たされ、“霊”が語らせるままに、ほかの国々の言葉で話した。

この出来事は、現在でもペンテコステと呼ばれ、教会が誕生した記念の日となっている。聖霊は風のように入ってきて通り過ぎるのではなく、弟子たち一人一人に分かれて、まるで各人に特別な能力を注入したように描かれている。突然、ほかの国々の言葉で話したとある。聖霊は、土で造られた人間に命を与えたように、人間に様々な賜物(カリスマ)を与える存在である。

●パウロの回心 使9:17-19

この聖霊降臨の出来事の後、パウロ(サウロ)の回心の物語がある。パウロは、回心する前は、キリスト教徒を迫害する熱心なユダヤ教徒であった。彼は天からの光で目が見えなくなり、その時、イエスの声を聞いた。そして、アナニアという人物によって目が見えるようになり、洗礼を受けた。次のように書かれている。

アナニアは出かけて行ってユダの家に入り、サウロの上に手を置いて言った。「兄弟サウル、あなたがここへ来る途中に現れてくださった主イエスは、あなたが元どおり目が見えるようになり、また、聖霊で満たされるようにと、わたしをお遣わしになったのです。」すると、たちまち目からうろこのようなものが落ち、サウロは元どおり見えるようになった。そこで、身を起して洗礼を受け、食事をして元気を取り戻した。

●アダムの子・キリストの救い ロマ5:19

パウロは罪についてローマの信徒への手紙で詳細に語る。聖書全体がアダムに始まりキリストで終わる罪の物語である。アダムから罪が始まったならば、アダムを人類の祖先とするなら全人類の罪はアダムが原因である。

一人の人の不従順によって多くの人が罪人とされたように、一人の従順によって多くの人が正しい者とされるのです。

すべての人を回心に導くキリストと読めることができるので、回心の三一性モデルはキリストの三一性モデルと言えるのかもしれない。

●パウロの罪の法則 ロマ7:25

パウロは律法が罪を明らかにしたと解釈し、罪に関する実に緻密な議論を行う。その様子は、ユダヤ教の指導者であったパウロが回心してキリスト教に至った心の葛藤を見る思いがする。例えば、次の肉と心に関する言葉が、そのような例の一つである。

わたしたちの主イエス・キリストを通して神に感謝いたします。このように、わたし自身は心では神の律法に仕えています、肉では罪の法則に仕えているのです。

●命をもたらす霊の法則 ロマ8:2

この罪の法則は、霊の法則によって解放される。回心に繋がるのである。

キリスト・イエスによって命をもたらす霊の法則が、罪と死との法則からあなたを解放したからです。

●アテネの説教 使17:26-28

使徒言行録はイエスの弟子やパウロの宣教の記録である。イエス・キリストについて説教し、洗礼を授けて布教した。パウロは、異邦人伝道者としてギリシャ、ローマへとキリスト教を伝道した。ギリシャのアテネで最初に行った説教の中に、本論でテーマとしている言葉がある。

神は、一人の人からすべての民族を造り出して、地上の至るところに住ませ、季節を決め、彼らの居住地の境界をお決めになりました。これは、人に神を求めさせるためであり、また、彼らが探し求めさえすれば、神を見いだすことができるようにということなのです。実際、神はわたしたち一人一人から遠く離れてはおられません。皆さんのうちのある詩人たちが、／『我らは神の中に生き、動き、存在する』／『我らもその子孫である』と、／言っているとおりです。

これはキリスト教徒では無い人々を想定して、どこの国の人々も同じ創造者である神から生まれたと語る。この異邦人伝道の在り方は、キリスト教と社会福祉に関する考察の基本と同様であろう。すなわち、キリスト教社会福祉という分野を考える時、対象とする人々は特定の宗教によらない。キリスト教社会福祉は、キリスト教の教えにもとづいて、すべての宗教を信じる人々にとって有益でなければならない。アウグスティヌスが、神を善や他の言葉で置き換えることの根底には、聖書の神を知らない人々を想定していると思われる。

●同じ霊が与える賜物 一コリ12:3-13

人々の中に存在する共通のものによって、人々が一つになることを表現する聖書の言葉は多い。例えば、神の霊が注がれて一つになる形態が多い。霊の賜物については以下のように記されている。

ここであなたがたに言っておきたい。神の霊によって語る人は、だれも「イエスは神から見捨てられよ」とは言わないし、また、聖霊によらなければ、だれも「イエスは主である」とは言えないのです。賜物にはいろいろありますが、それをお与えになるのは同じ霊です。務めにはいろいろありますが、それをお与えになるのは同じ主です。働きにはいろいろありますが、すべての場合にすべてのことをなさるのは同じ神です。一人一人に“霊”の働きが現れるのは、全体の益となるためです。ある人には“霊”によって知恵の言葉、ある人には同じ“霊”によって知識の言葉が与えられ、ある人にはその同じ“霊”によって信仰、ある人にはこの唯一の“霊”によって病気をいやす力、ある人には奇跡を行う力、ある人には預言する力、ある人には霊を見分ける力、ある人には種々の異言を語る力、ある人には異言を解釈する力が与えられています。これらすべてのことは、同じ唯一の“霊”の働きであって、“霊”は望むままに、それを一人一人に分け与えてくださるのです。体は一つでも、多くの部分から成り、体のすべての部分の数は多くても、体は一つであるように、キリストの場合も同様である。つまり、一つの霊によって、わたしたちは、ユダヤ人であろうとギリシア人であろうと、奴隷であろうと自由な身分の者であろうと、皆一つの体となるために洗礼を受け、皆一つの霊をのませてもらったのです。

これはパウロの有名な霊の一致の部分の抜粋である。「聖霊によらなければ、だれも『イエスは主である』とは言えない。」という部分は、神についての事柄は聖霊をとおして各人に与えられるという信仰である。回心を通じて、人々はそれぞれに応じて聖霊を受け、各人に与えられた神の霊は全体の益となる一体性が形成される。共通のものを媒介とする隣人愛を考える時、聖霊による一致は最も適当な信仰的な一例である。

4 考察

4.1 回心の理解

上記の結果を基に、善、悪、回心に関する事項について、アウグスティヌスのプラトンの理解と聖書信仰を対比して以下に整理する。

- 1) 人間が善の存在である点は共通している。聖書信仰は人間の創造物語のとおりである。プラトンの理解では、天地創造の神は存在しないが、すべての起源が善なので人間も善の存在である。
- 2) プラトンの理解では、すべてが善を起源とするならば悪は存在しない。しかし、人が善から乖離することがあり、その時善くなろうと意志を働かせない時、それが悪に相当する。聖書信仰も同様に、すべてが良く創造されているので悪は存在しない。

しかし、人間の意志で神から背く時、そこに悪が生じる。両者の考え方は共通している。

- 3) 回心の原因が、人間の「意志の力」によるのか、あるいは「神の力」によるのかに違いがある。この力は、善あるいは神の中で心に働きかける力と考えると、場の理論における場の力の類比が可能となる。
- 4) 回心には、「心、善き心、意志」の三一性が認められる³¹。「心」はすべてが「善き心」ではなく、「心」が「より善き心」に向かうのが回心である。愛の三一性に含まれる概念である。
- 5) 回心の三一性は、記憶・知解・意志からなる精神の三一性モデルの外に向かう行為の一つとも考えられる。それは、同時にパネンベルクの三位一体論のモデルでもある。回心する意志によって、回心に必要な記憶と知解が機能して回心が起こる。
- 6) 回心は受洗と密接な関係があり、聖霊による洗礼のさまざまな状況が聖書に記されている。ペンテコステ（聖霊降臨）の記事は集団的な洗礼のようにも見える。回心は受洗とは言わないが、一般的に回心して受洗する場合が多い。
- 7) ペンテコステの出来事は、聖霊が降る時は聖霊が空間的に広がる表象、聖霊が一人一人の上に留まる記述は、聖霊が局在している表象である。聖霊について、広がりのある表象と局在的な表象の両面あることは、場の量子論³²の表象と一致する。

4.2 回心の三一性モデル

(1) 個人の回心

善から離れた個人が善に立ち返る回心に、「心、善き心、意志」から成る三一性が認められる。愛の三一性と対応関係は、「愛する人」が回心を望む主体の「心」、この人が「愛するもの」は「善き心」、自分自身の心に善が欠けていること理解し改善する「意志」である。意志は、自己を愛する「愛」と同じである。回心はこのような愛の三一性を構成する。

一方、キリスト教は回心の宗教とも言える。例えば、「悔い改めよ。天の国は近づいた」（マタ3:2）というイエスの言葉が思い出される。イエスは人々に回心を促しているのである。さらに、回心して弟子となった者には、「かの日には、わたしが父の内におり、あなたがたがわたしの内におり、わたしもあなたがたの内におることが、あなたがたに分かる。」（ヨハ14:20）と語る。この三位一体の交わりは、「父」と「私たち」が「イエス」を共有する形で、回心してイエス・キリストを信じる者と神の関係を表している。

(2) 集団の回心

アウグスティヌスは回心が誰にでもあることを当然知っている。次の一文の「私たち」とある部分からそれを読み取ることができる。「だから、この善は私たち各自から遠く離れて在るのではない。私たちはこの善の中に生き、動き、存在する（使徒17:27, 28）からである。」

もし、ある集団の一人一人が共通の善を認識したとすると、この集団はこの共通の善に向かって生き、動き、存在する。その中には、回心も当然含まれるであろう。ペンテコステと同様な回心が同時に起きることは無いかもしれないが、社会的な共通の善に向かって実現することは十分考えられる。その時、共通の善の中を生きる人間が互いに影響を及ぼし合い、互いに愛し合うことが社会的に実現する。実際、最近アジアの国で起こっている軍事政権に対する市民の抵抗運動が現実的な例である。

一方、聖書にあるペンテコステの出来事は、集団の宗教的な回心である。イエスが十字架で処刑された後、弟子たちとイエスの関係者は、自分たちもひどい目にあわされ、罰せられることを恐れていた。イエスの仲間だと周囲に気づかれないように、ひっそりと部屋に集まっていたのである。そこに聖霊が下り、ペンテコステの出来事が起こったのである。彼らは別人になったように元気になり、福音を宣べ伝えるために部屋から出ていったのである。ペンテコステは教会が誕生した記念行事として現在も広く行われている。

(3) 回心の三一性モデル

以上の考察から、個人でも集団でも、善あるいは神に向かって回心する記述がテキストに認められる。回心には、善に向かうプラトニックな回心と、神に向かう聖書信仰的な回心がある。これらの回心は、上記の考察からすべて愛の三一性を満足している。次に問うべきことは、これらの回心の三一性が三位一体の神のモデルとなり得るのかという点である。

最初に、聖書信仰的な面からペンテコステの回心について検討する。この出来事は、三位一体の一つの位格である聖霊が人々に降り、人々は生前のイエスが語ったことを思い出し、イエスの真の弟子へと回心する。この場合の回心の三一性は、「弟子の記憶、イエスを知解する心、イエスへの愛」となる。信仰的には三位一体の神とイエス・キリストの霊が、弟子に回心を促したのである。ペンテコステは集団的・聖書信仰的な回心の三一性モデルと言えるであろう。

次に、プラトニックな面から善への回心について検討する。この回心の出来事は、善を求める善良な人々が、自らの意志に基づいて起こる。彼らの記憶には善が刻まれており、知解において善を求め、また、善から乖離した自己を認識することができる。そして、回心は善く成ろうとする意志によって起こる。この場合、回心の三一性は、「記憶、善の知解、善への愛 (amor)」となる。さらに、共通の善、共通の善の知解が、共通の善への愛によって集団を回心に促す。プラトニックな回心においても、集団的な回心の三一性が十分考えられる。

以上の、回心の類比に関する考察は、アウグスティヌスが論証した三位一体の構造に関する議論を超えて、パネンベルクの三位一体論における一つの行為にまで広がっている。イエス・キリストが三位一体の人となった子であり、そのイエス・キリストによる救いの行為が、私たちの善に向かう回心と似ているとするのである。父・子・聖霊なる神を対象とする静的な三位一体論から、神の行為としてのパネンベルクの三位一体論に議論が広がっているのである。三つの実体一つの本質という三位一体の表現に、パネンベルクが言うように、一つの

本質に一つの行為を加えた議論である。

愛の三一性をアウグスティヌスの三位一体論の中心理念とした時に、回心の三一性モデルが神の行為と理解できる。回心の行為は、三位一体の神とイエス・キリストの霊の共同の行為であり、その行為の類比として、人々が共通の善に向かう回心を、回心の三一性モデルとしている。宗教的な回心とプラトンの回心を対比したモデルである。

この回心の三一性モデルによって、アウグスティヌスの三位一体論、すなわち、精神の心理学的な三一性モデルは再評価される。すなわち、彼の精神の三一性モデルは、回心の行為をとおして、父・子・精霊の静的な三位一体論から、父・子・精霊とイエス・キリストを含めた動的な社会的三位一体論へと拡張されるのである。

5 結論

アウグスティヌス『三位一体論』第8巻及び『聖書』をテキストとし、第8巻の結論である愛の三一性を「善」に探求し、回心の三一性モデルの可能性について、次の四つの視点から検討した。一つ目は、アウグスティヌスの三位一体論の根本思想である愛の三一性：“愛する人、愛されるもの、意志または愛”との関係。二つ目は、個人、集団、共同体に対する回心や悔い改めなど、さまざまな聖書の記事との関係。三つ目は、パネンベルクの場の理論に基づいて、善または神を場と考えた時に、心に作用する力。四つ目は、パネンベルクの三位一体論における外に向かう一つの行為としての回心理解、以上である。

考察の結果は次の二つにまとめられる。一つ目は、回心の三一性モデルは、アウグスティヌスが論じた記憶・知解・意志または愛による精神の三一性モデルの外向きの行為として理解できること。二つ目は、回心の三一性モデルは、聖書の集団的な回心についても、類比として説明が出来ること。以上により、「精神の三一性」に「回心の三一性」を加えることにより、アウグスティヌスの三位一体論が社会的三位一体論へと拡張される可能性が明らかになった。

凡例

- ・ 聖書は日本聖書協会「新共同訳聖書」を使用する。
- ・ 聖句の引用は、文書の省略名に続いて、章と節をコロンで区切り表示する。

[例] ヨハ1:1 (ヨハネによる福音書1章1節)

- ・ 参考文献リストにある文献の引用は、書名を省略して、文献リストの通し番号を [] 内に表示する。引用ページを指示する時は続けてページを記す。

[例] [1] p.12-13 文献リスト [1] の12から13ページ)

- ・ アウグスティヌスの著作を本文で引用する時は、『三位一体論』を「三」、『告白(上)』を「上」、『告白(下)』を「下」として、続けて、巻、章、節を：で区切りカッコ内に表示する。段落は必要に応じて節の次に：を置き、節ごとに、最初から付番した段落通し

番号を表示する。ただし、序章の時は章番号に序と記す。

〔例1〕(三15:1:1)『三位一体論』第15巻1章1節、

〔例2〕(下13:1)『告白(下)』第13巻1章

引用文献・注

- 1 [1]
- 2 [5]: アウグスティヌスの社会的三位一体論に関する一考察: 隣人愛の三一性モデルの可能性
- 3 [5] p.49
- 4 [5] p.39
- 5 アウグスティヌスは神を説明する道具としてプラトン哲学を用いるのでプラトンのと表現した。
- 6 [4]: アウグスティヌスの三位一体論が描く隣人愛: 第8巻にある回心する心の心理学的な分析
- 7 ヴォルフハルト・パネンベルク (Wolfhart Pannenberg, 1928年10月2日 - 2014年9月5日) は、ドイツの神学者。ルター派出身で、エーバーハルト・ユンゲル、ユルゲン・モルトマンとともに、カール・バルト、ルドルフ・カール・ブルトマン以後の世代を代表する。希望の神学の流れを汲みつつ、独自の歴史神学を展開した。
- 8 パネンベルクの神学的な場の理論は物理学の場の理論がモデルである。パネンベルクは19世紀の古典的な場の理論を参考にしたようであるが、場の理論は現代も進化している最先端物理学である。歴史的に見ると、1905年アインシュタインが当時電磁波として理解されていた光に粒子的な性質を持つ「光子」の存在を証明した意義がまことに大きい。自然に波動性と粒子性の二重性が存在する画期的な発見である。この発見が、場の理論の発展に大きな貢献をもたらした。アウグスティヌスのように、三位一体論を自然現象の類比に求めようとする場合には、波動性と粒子性の二重性は大変都合が良い。例えば、聖書にある聖霊は風のように空間を広がる表象、人間に与えられた賜物(カリスマ)として空間に局在された表象、この二つが聖書に描かれている。次のYouTube動画は、光学機器の世界的日本企業が作成した光の二重性の実験動画で、教材として広く使われている。「単一フォトンによるヤングの干渉実験」(浜松ホトニクス/1982年)
https://www.youtube.com/watch?v=ImknFucHS_c&t=237s 2021年3月20日閲覧
- 9 [5] p.45-48
- 10 筆者は以前、原子核実験に従事して世界的な論文発表の経験がある。パネンベルクが場の理論を三位一体の類比に求めた点は十分理解できる。
- 11 [8] p.78: プロティヌスの思想の原理は、一者、知性(ヌース)、魂の三つである。
- 12 マイケル・ファラデーは1831年電磁誘導の法則を発見して電磁場の概念を導入した。
- 13 [6] p.423-424
- 14 [6] p.424
- 15 [6] p.426
- 16 [6] p.426
- 17 [6] p.426-427
- 18 [6] p.312-313
- 19 [7] p.456
- 20 [6] p.313
- 21 [2] p.200
- 22 [2] p.228、上7:13:19「造られたものは神をたたえる」同様の形式で書かれている。

- 23 [8] p.59：プロティノスの哲学についてたいへん分かり易い解説。
- 24 [3] p.274：新プラトン派のプロティノスの『エンネアデス』の一部、[8] p.68：プロティノスの「発出論」は、時間的な因果関係を持たず、創造とも異なる独特の哲学である。
- 25 「しかも、ごらんください、わたしは、あなたがわたしを仕上げられるのと、あなたがそれからわたしを造られたものとのすべてに先立つあなたの善性によって存在するのである。」「あなたの被造物はあなたの善性の充滿していることによって存在し、あなたになんら利益を与えることもなく、またあなたから出ながら、あなたに等しくない善もあなたによって造られることができたのであるから、やはり存在するのである。」「それらのものはあなたの御言によってあなたの統一性へ呼び返され、形成され、唯一最高の善なるあなたによって、「すべてはなほだ善に」存在するのではないなら、なお無形態なものとして、あなたの御言に依存しているであろう。」[3] 13:1:1-13:2:2
- 26 [3] p.205：下13:5:6
- 27 愛の三一性は日常的な三一性ではなく、父・子・聖霊に関する三位一体の教理の形而上学的モデルと考えたほうが適当である。従って、「愛する人」と「愛されるもの」は、基本的に同質性が要求される。回心の三一性は、「心」も「善の心」も同質であり、その点で愛の三一性を満足していると考えている。
- 28 筆者の個人的な見解として、三位一体の神の類比としては、アウグスティヌスの精神の三一性モデルが歴史上最も聖書に適合した優れたモデルであり他には考えられない。もちろん、序論でパネンベルクが語るように、微かに神を見るモデルに過ぎない話である。
- 29 信仰によって、わたしたちは、この世界が神の言葉によって創造され、従って見えるものは、目に見えているものからできたのではないことが分かるのです。(ヘブル11:3) 永遠の王、不滅で目に見えない唯一の神に、誉れと栄光が世々限りなくありますように、アーメン。(一テモ1:17)
- 30 序論 1. 3 パネンベルクの三位一体論
- 31 [4] p.8
- 32 場の量子論では電磁場は「電磁波」と「光子」という波動性と粒子性を併せ持つ。他にも、重力や核力についても同様な二重性が知られている。

参考文献

- [1] アウグスティヌス. 三位一体論. 中沢宣夫訳. 東京, 東京大学出版会, 1989, 540p.
- [2] 聖アウグスティヌス. 告白 (上). 服部英次郎訳. 改訳初版, 東京, 岩波書店, 2012, 329p. (青805-1岩波文庫)
- [3] 聖アウグスティヌス. 告白 (下). 服部英次郎訳. 改訳初版, 東京, 岩波書店, 2013, 291p. (青805-2岩波文庫)
- [4] 九里秀一郎. “アウグスティヌスの三位一体論が描く隣人愛：第8巻にある回心する心の心理学的な分析”. 浦和論叢. Vol.60, 2019-2, p.1-23 (2019)
- [5] 九里秀一郎. “アウグスティヌスの社会的三位一体論に関する一考察：隣人愛の三一性モデルの可能性”. 浦和論叢. Vol.63, 2020-8, p.35-54 (2020)
- [6] パネンベルク, ヴォルフハルト・. 組織神学 第一巻. 佐々木勝彦訳. 東京, 新教出版社, 2019, 518p.
- [7] マクグラス, A・E・. キリスト教神学入門. 神代真砂美訳. 東京, 教文館, 2002, 804p.
- [8] 水地宗明, 山口久義, 堀江 聡編, 新プラトン主義を学ぶ人のために. 京都, 世界思想社, 2014,

393p.

謝辞

この研究は多くの精神的な障害を持つ方々との交流から始まりました。さらに、教会や職場、福祉施設での多くの方々との出会いを通じて、キリスト教と社会福祉の関係に対する関心が深められたことにたいへん感謝しています。神学に関する専門的な情報は、日本基督教学会の先生方から頂きました。ここに合わせて感謝いたします。

Summary

A Study on Augustine's Theory of Social Trinity: Trinity Model in Conversion

Shuichiro Kunori

Augustine explained the Trinity of conversion using the Platonic good-mind relationship in Volume 8 of *The Trinity Theory*. The author is very interested in the relationship between the target social trinity model and the conversion trinity. To clarify this point, this paper examines the following four perspectives. The first is the trinity of love, which is the fundamental idea of Augustine's theory of the Trinity: the relationship with "the lover, what is being loved, and the action of love". The second is the relationship with various Bible articles, such as conversion and repentance for individuals, groups, and communities. The third is the force that acts on the mind when considering good or God as a field, based on Pannenberg's field theory. The fourth is the understanding of conversion as an outward act in Pannenberg's theory of the Trinity. The results of the examination can be summarized in the following two points. First, the conversion trinity model can be understood as an outward act of the spiritual trinity model of memory, wisdom, will, or love discussed by Augustine. Second, the trinity model of conversion seems to explain the collective conversion of the Bible as an analogy. From the above conclusions, it seems that Augustine's theory of trinity is extended to the theory of social trinity by adding the trinity of conversion to the trinity in spirit.

Keywords Augustine, Conversion, Pannenberg, Field Theory, Social Trinity

(2021年5月13日受領)

